



十 お腹の中では

その頃、お腹の中では。

「大王。もう、体がもちません。少し、休憩させてください」

固体班の隊長が大王に泣きついた。

「作業はどこまで、終わっているんだ」

「すじ肉からこんぶまで一通り、吸収できましたが、再び、こんにゃくがやってくるとは思いませんでした。また、おでん三兄弟があらわれるんじゃないかと心配しましたが、噛み砕かれていたのでそのおそれはありませんでした。それでも、食べ物の量のはんぱじゃありません。なんとか、はんぺんまでは消化できましたが、まだ、じゃがいも、こんぶ、それに御茶漬が残っています」

「そうか。まだそんなに残っているのか」

大王は目の前には、じゃがいもとこんぶとお茶漬が巨大な山となって積み上げられていた。

「リキッド班はどうだ」

「はい」リキッド班の隊長が大王の前に駆け付けた。

「みんなの様子はどうだ」

「思った以上に水分が多いため、仕事はまだ残っています」

「そうか」

大王は、再び、じゃがいもの山、じゃが山をじっと見つめる。

「いくらお腹が空いているからと言って、こんなに食べられたんじゃ、消化ができないじゃないか。主は一体、何を考えているんだ」

大王は怒りを覚えるが、それでも、このままにしておくわけにはいかない。大王自らが先頭に立って、

「とにかく、この目の前の、じゃがいもとこんぶとお茶漬を片付けるんだ」と檄を飛ばし、手や足、お腹などを使ってすり潰そうとする。それを見て、固体班とリキッド班の隊長たちも

「みんな。大王に続け」とじゃが山に飛び込んで行く。

固体班およびリキッド班の隊員たちも大王や隊長に倣って、最後の気力を振り絞り、消化活動を続けた。そして、ようやく、お茶漬の最後のごはんつぶを消化の穴に放り込み、お茶漬の水分の最後の一滴を吸収し終えた。

「大王。お、終わりました」

「こ、こちらです」

固体班とリキッド班の隊長は大王に報告すると同時に、その場に倒れ込んだ。隊員たちは、息も絶え絶えで床に寝転がっている。

「みんな。よくやった。御苦労さまだ。ゆっくり休んでくれ」

と部下たちを労いながら、大王もその場に膝から体ごと沈む込んだ。